

親鸞教学のもつ菩薩道の理念の構造

石 田 充 之

一

親鸞聖人の教学は、その広汎な背景をなす浄土教形成の全体的な基盤よりながめても、又直接的に、その主著なる『教行信証』を中軸とする『和讃』、『唯信鈔文意』、『自然法爾章』等の法語などに顧みるも、その基底に、大乘仏教的ないわゆる菩薩道的な根本精神とも見なされるべき理念を、如何に、そのよってもって立つべき所として基盤づけられているか容易に窺い得るであろう。『教行信証』の各巻に亘って『往生論註』の釈文を引用して、そこに、生即無生因縁生・因果一異・二種法身・不一不異・法性無相無知・生死即涅槃・随順法性不乖法本・海性平等一味等のテクニクでもって端的に表示されるような大乘仏教的な理念の基底づけを与えて、龍樹・羅什系統のいわゆる空観哲学の介在までも予想せしめ、更に『涅槃経』の如きをたびたび引用して、実諦・一道・一切衆生悉有仏性・信心仏性・真解脱・不生不滅・不老不死・虚空無為・涅槃仏性等の理念の基底づけの如きもあることをも明らかにし、その私釈の如きに至っては、その「行巻」の一乗海積下に於て、念仏が真如一実の宝海であり誓願一

仏乗の法なることを力説して、究竟法身・仏乗・第一義乗なることを説き、それが、久遠より已來の凡聖所義の難修難善の川水を転んじ、逆謗闡提の恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実大宝海水と成ずるの道なることを明らかにして、しかも、「まことに知んぬ、經に説いて煩惱の水解けて功德の水と成ると言うが如し」（原漢文）などと結ばれる。その辺の所見の一端に顧みれば、如何に大乘仏教的な菩薩道としてくりひろげられてくる如き基本的な理念が親鸞教学の基底となっているかを、より具体的に容易に推察し得るであろう。

かような基本的な理念の基底づけこそが、その最初の「教巻」の開巻劈頭に於て、「謹んで浄土真宗を按ずるに二種の廻向あり一には往相、二には還相なり」（原漢文）等と、浄土真宗の教法が往相廻向の自利、還相廻向の利他なる自利即ち上求菩提、利他即ち下化衆生の両者相待って完備される大乘菩薩道としての宗教なることを断言せしめるに至っていることはいまでもないことであろう。但だ、その菩薩道の理念内容が親鸞教学特異のものを打出されることは看過してならぬところである。『教行信証』に開顯されてくるような、かような理念の内容は、更に『和讃』の如きに至れば、「本願円頓一乗ハ逆惡摂スト信知シテ煩惱菩提体無二トスミヤカニトクサトラシム」とか、「罪障功德ノ体トナルコホリトミツノコトクニテコホリオホキニミツオホシサワリオホキニ徳オホシ」（以上、曇鸞讃）と讃ぜられる一端にも、更に『唯信鈔文意』に、「マタ自ハヲノツカラトイフヲノツカラトイフハ自然トイフ自然トイフハシカラシムトイフシカラシムトイフハ行者ノハシメテトモカクモハカラハサルニ過去今生未來ノ一切ノツミヲ善ニ転シカヘナストイフナリ 転ストイフハ ツミヲケシウシナハスシテ 善ニナスナリ ヨロツノミツ大海ニイレハ スナハチウシホトナルカコトシ」などと、説明される如き理解に顧みるも、容易に具体的に窺いうるところであろう。

然しながら、今問題とされてくることは、上に引用したような見解の一端によるも容易に想察されてくるように

親鸞教学に示される大乘菩薩道的な根本理念とも云うべきものは、そこに、親鸞教学特異の理念内容ともいったものを、その構造の内容としていると考えられてくることである。従って、その特異の理念内容とも推測されてくるものは、如何なる内容の理念を構成するものと考えられ得るのか、又考えたらよろしいのか、以下その辺の課題について若干の検討を試みてみることにしたい。

註

- 1 拙論『親鸞聖人の浄土教学に於ける基本的な理念の形成について』（真宗学25、26 昭和卅六年十二月刊）、同 On the Formation of the Central Concepts in Shinran's Religious System（印度学仏教学研究十卷一号 昭和卅七年一月刊）、拙著『浄土教教理史』（昭和卅七年十一月刊）等参照

二

一般的にいつて、大乘菩薩の実践は布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六度の行にあるとされるわけであるが、親鸞聖人の師法然上人は、その遺著『大経釈』や『選択集』の本願章などによれば明らかなように、発菩提心・観念・持戒等の自力的実践行を廃して、法蔵菩薩の第十八願所誓の他力称名念仏の一行を実践すべく主張せんとして、法蔵が布施・持戒・忍辱等の六度等の自力成仏行を選捨て、勝易の二義ある他力称名念仏の一行を選取り、しかも、法蔵は、その他力称名念仏一行を誓う第十八願を根本とし本体とする四十八願を成就すべく、『大経』に説くように、兆載永劫の自利利人・人我兼利なるジャータカ物語に出てくるような慈悲布施の極まれる布施・持戒・忍辱等の六度円満し万行具足して、他力念仏一行救済の本願を成就されたことを力説されるのである。

かくして、かような意味で、自力成仏道たる聖道門的な布施・持戒等の六度行を始めとする発菩提心・観念等の自力成仏の実践行を捨てて、阿弥陀仏それ自体に於て選取し救済の本願行として誓われたその本願の誓意に順じ

て、他力称名念仏の一行を専修すべく主張されるのである。

従って、以上のような、親鸞聖人の師法然上人の主張によれば、聖道門的な成仏道としての自力向上門的な菩薩道的実践としての六度行に簡別される所のいわゆる浄土門的な往生成仏道としての他力向下門的な法藏菩薩道の動態・価値を内容とする他力念仏一行の実践が打出されるに至っていることを容易に理解せしめられ得るであろう。

そこには、自力向上門的な聖道門的菩薩道を廢して、他力向下門的な浄土門的法藏菩薩道を立てていくといった如き意味に於て、基本的には、自利即利他、上求菩提下化衆生を実現すべき大乘仏教的な菩薩道的な根本理念が、共通地盤として設定せしめられていることが予想されるが、果して、自力向上門的菩薩道の基本理念の構造内容と他力向下門的菩薩道の基本理念とは、構造内容を異にしていまいと考えるよろしいか、どうか、可なり問題が提起されてくる。

法然上人の弟子としての親鸞聖人の場合、勿論、その他力念仏一行専修道をより徹底して主張されたわけで、その実践の内容本質は他力向上門的な浄土門的法藏菩薩道をもって内容づけられるわけである。従って、その場合、上記のように大乘仏教共通的な煩惱菩提体無二・生死即涅槃等といったようなテクニクで表示される如き理念をその教学の基本理念とされてはいるが、かような理念の構造内容是如何に理解されうべきものなのか。自力向上門的菩薩道の大乗仏教的な理念構造と、その内容構造を同一的に理解してよろしいのかどうか、そこには、その教学の基本構造如何の問題に拘って意味深く課題が提起されてくる。

三

然るに、以上のような親鸞教学のもつ他力向下門的な菩薩道の根本理念の内容の詮索に当って、その意義をより

明確にする意味で考え合わされてくることは、同一法然門下として位置づけられる鎮西派祖聖光房弁長師や西山派祖善慧房証空師などの、かような点についての理解如何の問題である。大局的にいって、同一法然門下として位置づけられる意味に於て、弁長師や証空師の場合も、親鸞聖人の場合と同様に、自力向上門的な聖道門的菩薩道観を廢して、他力向下門的な浄土門的菩薩道観に立つものであることはいうまでもない。かかる場合、自力向上門的な菩薩道観というのは、自己の修行の力によって上求菩提下化衆生の自力即利他の実践を深めることによって仏覺を獲得しようとの理念に立つもので、仏覺を求める修行者としての衆生は、自らの実践修行の力によって仏覺を実現し得るとの立場に立つものなる故、そこでは衆生より仏へと通ずる道が開かれており、衆生と仏とは迷悟の差はあれ共通性をもつものだ、との理念が極めて強く生仏相互の間に介在せしめられていることを容易に理解せしめられ得るであろう。然も、さらにより根本的には、衆生と仏、迷と悟、との差はあれ、そこには、衆生は仏に依ってあらしめられ、仏は衆生に依って存在せしめられ、又迷は悟に依ってあり、悟は迷によって存在せしめられるとの、いわゆる生仏・迷悟相依相成といった如き、大乘仏教的な緣起の理念をもって基底づけられていることも容易に想倒せしめられ得る所であろう。かような生仏・迷悟相依相成的な理念を基底として衆生より仏への自力実践的な向上が可能であると認容される所に、いわゆる自力向上門的な聖道門的菩薩道観の形成があることを、今は意味しているのであって、かような意味からは自力向上門的菩薩道観は、衆生と仏、迷と悟との相違性には勿論深く注目するが、それ等の相違する個々存在の同一性といった場により強く注目するものとして、同一性的緣起ともよばれるべき理念を、その構造内容としていても見たらどうかと考えられる。

然るに、法然を主軸として展開されてきた法然門下の他力向下門的菩薩道観ともみなされるものは、全般的にいて、衆生の自力修行力にのみよっては仏覺の実現は不可能であるほど、衆生の迷妄性は深く、衆生の修行の力で

は実現不可能なほど仏覚は高遠なのである。極端に表現すれば、衆生は全く仏的存在でなく、仏は全く衆生的存在でない。迷と悟とは極めて深く隔たり断絶的に位置づけられる。然し、それでは、生仏・迷悟全く断絶するかというに、然らずして、煩惱菩提体無二と説き、生死即涅槃と説く大乘仏教的な理念を許容するのである。従って、かような意味合いよりすれば、法然を中心に展開されてきた他力向下門的な菩薩道観は、今の場合、一応、生と仏、迷と悟などが、徹底的に相反せしめられつつ、然も同一性的に縁起し結合せしめられる理念構造に立つものといった意味で、相反性的縁起の理念に立つものであるとでも、よんだなら如何がかと考えるのである。

四

ところで、かように法然を主軸とするものがいわゆる相反性的縁起とでもよばれるべき大乘菩薩道の理念の構造内容をもつものと理解する場合、弁長師や証空師はその辺について如何なる見解を示されていると理解されうるかというに、大体次のように理解される。

先ず、鎮西派祖^①弁長師の教学の一端を窺うに、勿論、法然を承けるものとして、今日の我々が末法鈍根無智なるものであることを強調し（徹選択集巻上等）、その遺著の全体に亘って第十八願による称名念仏の一行専修を勧められるわけである。しかし、聖道・浄土の二門はいずれも成仏の道であって本質的には一実相法より開かれた二門にすぎずとし（浄土宗要集四・五、徹選択集上巻、識知浄土論等）、然も、称名念仏の一行と三福六度等の諸行万行とは総別・開合の関係にもあると見なすべきで（徹選択集巻下等）、法蔵菩薩も諸仏と同様に総別二願を起されて総願中に三福六度等の諸行を、別願四十八願の中に称名念仏一行を往生行として特に誓い（浄土宗要集一、識知浄土論、徹選択集下巻等）、両者総別難易の差はあれ、いずれも浄土往生行であり成仏の実踐行である、との見解を終始一貫して打

出されるのである。かような所見によれば、それは、師法然伝灯の他力念仏一行専修といった実践理念を打出す基底理念としての他力向下門的ないわゆる相反性的縁起の基盤に立つものであることは了解されるが、他力念仏一行専修の内容性格に一分自力聖道門的な実践行としての三福六度行的実践性を許容してゆくといった傾向がみられてくるわけで、そこには、基本理念的には自力向上門的な同一性的縁起の場に若干同じてゆくといった趣きが窺われる。

従って、かような弁長師の如き主張は相反性的縁起の立場には立つが同一性的縁起の場を一分許容するものとして、基本理念的には、相反性的同一性的縁起の構造理念を、その大乘菩薩道の構造理念の内容とするものであるとでもいったならどうであろうかと思うのである。

次に、西山派祖証空師の教学の如き場合、その辺、如何に窺われるかというに、やはり、弁長師の場合と同様、我々人間惡を強調して（観念法門觀門義、礼讃觀門義等）、その全遺著を通して、第十八願の他力念仏一行専修に徹底すべく力說されることは一貫している。しかし、その主張の特色として注目されることは、天台教学的な諸法開会の理念を応用されたものと理解されるのであるが、善導諸疏の注釈書としての諸『觀門義』や『觀經疏大意』などといったものを通して終始一貫主張されてくる所は、聖道門行門もその実践行とされる六度万行より始めて父母孝養等の諸善に至るまでもそれ等のすべてを、本質的には浄土門觀門弘願の一法以外のものではなく、弘願他力念仏一行以外のものではないと、一切を浄土門他力念仏の一法に開會し、かくして、そこに、弥陀理性遍滿法界身説ともよばれるべき基本理念を確立し打出されてくることである。

従って、そこでは、聖道門は一応方便的に設けられた方便の仮説たるもの以外でなく、その実践行なる自力的な六度万行等は他力弥陀弘願念仏一行の一分たるに外ならないのである。で法藏の因位発願より中間の兆載永劫の六

度万行の修行に当っては、孝養父母等より始めて一切の自力的定散諸善を他力弥陀念仏の一行に改変すべく修行して、果上に於て他力念仏一行往生の誓願を成就されたと主張されるのである（女院御書等）。

かようにして、弥陀理性法界遍満の理念を強調されるわけであるが、このような主張が師法然の浄土一門他力念仏一行主義を強力に展開してくるものであって、かように今理解されるだけ、前記の弁長師の主張に比して、基本原理的な場に於ては、聖道門的な自力向上門的な同一性縁起の主張を許容せず、浄土門的な他力向下門的な相反性縁起の主張を確立してゆこうとしておるものであることは容易に窺知しうるであろう。しかし、この証空師の主張に於ては、弁長師の場合の如く、勿論聖道門諸行が許容はされないが、浄土門念仏一行へ同一体的な開会の主張が展開されても、それは不思議ではなく、当然のことであるかも知れない。しかし、法然上人の『選択集』の主張などを顧みると、聖道門諸行を廃捨して浄土門他力念仏一行を立ててゆこうとする意向が極めて強く、そこにこそ、自力向上門的な同一性縁起の根本理念に簡別される他力向下門的な相反性的縁起の理念の場が考えられてきたわけであるが、その辺、今の証空師の主張の根本理念は如何に考えられ得るであろうか。いずれにしても、以上のような証空師の弥陀理性法界遍満説の根本理念は、上に述べたような内容よりして、弁長師のそれとは異って、相反性的縁起の立場に徹底せんとはするが、自力的諸善行の一切を他力念仏一行と同一体であると開会的にみてゆかんとする理念に立つものとして、相反性的同一体的縁起とでもよばれるべき大乘菩薩道の構造理念をもつものとも考えたなら如何かと思惟するのである。

註

- 1 拙著『日本浄土教の研究』第三篇第四章の下（昭和廿七年十月刊）、同『浄土教教理史』第十章第四節の下（昭和卅七年十一月刊）等参照、
- 2、拙著『日本浄土教の研究』等三篇第二章の下（昭和廿七年十月刊）、同『浄土教教理史』第十章第二節の下（昭和卅七年十一月刊）等参照。

五

以上、法然上人の他力向下門的菩薩道観とも見なされるべきものの大乘仏教的根本的理念たる相反性的縁起構造とでもよばれるべきものを承けて、鎮西派祖弁長師が相反性的同一性的縁起とでもみなされるべき理念を形成し、西山派祖証空師が相反性的同一性的縁起とでもみなされるべき理念を形成されていると考えられ得ることを述べてきたのであるが、それ等にして、真宗宗祖^①親鸞聖人の教学に於ては、その辺、如何なる大乘菩薩道理念を構成されていると考えられ得るのか、最後に論及しておきたい。

結論的にいえば、親鸞教学に於ては、前述したような聖道門一般の自力向上門的な菩薩道観のもつ同一性的縁起とでも見なされるべき理念構造に全く対蹠する師法然伝統のいわゆる相反性的縁起とでもよばれるべき理念を徹底化する構造理念を打出されてきているとも考えられ得るのである。上記のように、親鸞教学の根底は、悉有仏性・煩惱即菩提・生死即涅槃・一法身・法性・実相・一乘円融・転成などといった。大乘仏教的基本理念の基底づけなくしては出すことの不可能なる理念をもって充塞されているわけである。しかし、そこでは、その主著『教行信証』などを中心に明示されるように、弁長教学にみた如く自力的聖道門的諸行の許容は全くなく、又更に証空教学にみられた如き自力的諸善行の開会といったことも全くなくして、仏教を知らざるものが、我執に貪著する邪偽な

るものとして退けられるのは勿論、自力聖道門も、更には浄土門の実践とされる第十九願要門の自力諸善行も、又更に第二十願真門の自力念仏専修までも、徹底的に廃除されて、第十八願の他力廻向の念仏一行専修の実践のみが所立とされ実践すべき所として打出されてくるのである。それは、確かに、師法然の『選択集』などに力説されようとした聖道門諸行を廃して浄土門念仏一行を立てようとした意図を、最も徹底化して打出したものといってもよいであろう。

従って、そこでは、自力向上門的菩薩道観構成の同一性的縁起の場が徹底的に排除されて、他力向下門的菩薩道観確立の相反性的縁起の場が徹底的に打立てられてくるのが考えられるのである。上に言及した『教行信証』の「行巻」の如きには、「久遠より已来、凡聖所修の雑修雑善の川水を転んじ、逆誘闡提の無明海水を転んじて、本願大悲智慧真実大宝海水と成ず」（取意）などと述べて、一切の自力向上門的な雑修雑善の実践的場は云うまでもなく、五逆・謗法・闡提といった極悪者の世界をも、真実大宝海水と転成する根源的理念の場が、親鸞教学のもつ大乘的菩薩道の基本的理念の場であることを付度せしめ、又『唯信鈔文意』の如きに更に、「自然トイフ……ハシカラシムトイフ過去今生未来ノ一切ノツミヲ善ニ転シカヘナストイフナリ、転ストイフハ ツミヲケシウシナハスシテ善ニナスナリ」等と述べて、上の「行巻」の転成の場が「ツミヲケシウシナハスシテ善ニナス」といった自然転成の場であることを明らかにされる如きに顧みれば、衆生と仏と、自と他と、又は生と死などが相互に徹底的に相反する如き迷妄的な場を、如何に根底的に越えて、自然法爾に生仏相依不二・自他相依不二にと他力向下門的に徹底して縁起不二にならしめてゆく如き、いわゆる相反性的縁起的理念の場を、その大乘菩薩道の理念構造の基底の場として構成されるに至っているか、その一端を推測しうるであろう。かような基本的理念構造の場が堅持されたればこそ、始めてよく、「謹んで浄土真宗を按ずるに二種の廻向あり」等と「教巻」の冒頭に語られるぞ

を得なかったことも容易に了解しうるであろう。かような相反性的縁起の理念の場こそが、「イロモナクカタチモナシ」と説かれる如き、赤色を赤色の如く、黒色を黒色の如くみる大乘仏教的な縁起の理念に裏づけられる自然法爾それ自体の場であり、その躍動界が他力向下門的菩薩道としての法藏菩薩道の顕現態であって、いわゆる「ツミヲケンウシナハスシテ善ニナス」自然転成の本願力救済界を成就し、他力往還二廻向をその内容本質とする絶対他力念仏実践の場を現成して与えることが考えられる。

いずれにせよ、親鸞教学のもつ菩薩道の理念の構造の内容は、理論的には、今の場合、なお詳論する必要があると考えるのであるが、紙数が迫ったのでこの辺で省略することとして、要するに、それは聖道門仏教一般と共に釈尊仏教の真髄としての大乗仏教的な縁起の理念の場にあらしめられるとはいえ、聖道門仏教の如く同一性的縁起の理念の場にあるものでなく、相反性的縁起の理念の場に徹せんとするものであると考えられることを明らかにして擱筆したい。（一九六三、六記、文部省科学研究費による研究）

註

- 1 拙著「日本浄土教の研究」の結篇の下（昭和廿七年十月刊）、同、「浄土教教理史」第十一章の下（昭和卅七年十一月刊）等参照。